

◎特集◎

- データで見る静岡県の外国人状況
- 静岡県海外技術研修員
研修レポート

- ★上海今昔物語 — 石川裕介所長
- ★中国豆情報 ドローン
- ★喫茶中国の現代事情 VOL.4
- ★中国の数学王 蘇歩青の足跡

邂逅 京杭大運河 — 浙江省杭州・拱宸橋



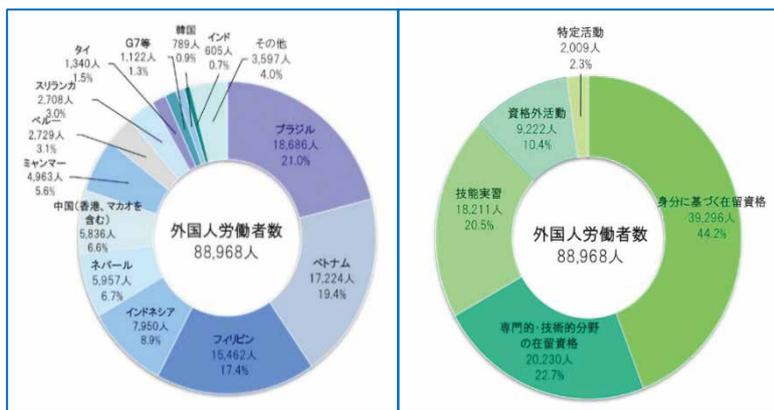
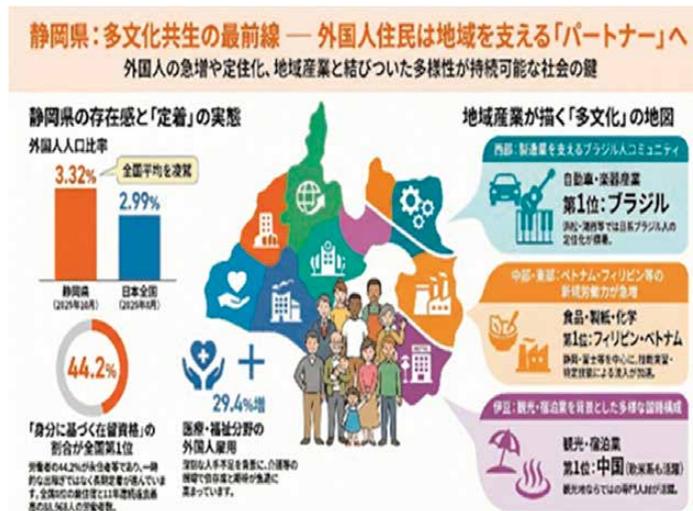
拱宸橋は、浙江省杭州市拱墅区に位置する石造アーチ橋であり、悠久の京杭大運河が杭州に到達する終点の象徴的建造物です。明時代末期に建設が始まり、清代を経て幾度の戦禍と修復を重ねながら現存しています。全長 98m、高さ 16m の石造三連アーチが運河水面に描く優美な曲線の造形と、歩行者専用橋として保全された石畳と欄干の彫刻は、歴史ある静謐な風致を今に伝え、杭州の興亡の歴史を見守り続けてきた「生きた歴史証言者」となっています。

静岡県に暮らす外国人 — データから見える新しい風景

最近、街中を歩いていると、心と耳に入る外国語が昔よりずっと増えたように感じます。数字を見ても、その印象は裏付けられており、2025年10月時点で県内に暮らす外国人住民は約11万6千人。総人口の3.32%を占め、全国平均を上回る割合です。東京や大阪のような大都市ではなく、工業地帯と地方都市が混在する静岡県でこれほどの集住が進んでいることは、県内産業が外国人労働力と深く結びついていることを物語っています。

産業がつくる「外国人が暮らす町」

外国人住民の分布は県内で均一ではありません。浜松市や静岡市といった大都市に多いのはもちろんですが、比率で見ると吉田町や菊川市、湖西市など、製造業が盛んな地域で特に高い割合を示しています。地域ごとに国籍構成も異なります。浜松・磐田など西部では、ブラジル国籍の人々が長く定住し、家族ぐるみのコミュニティを築いてきました。一方、中部・東部ではフィリピンやベトナムからの新しい労働力が増え、技能実習や特定技能制度を通じて若い世代が流入しています。伊豆地域では観光業の需要を背景に、中国籍の住民が多く、宿泊業やサービス業で活躍しています。産業の姿が、そのまま地域の国際色を形づくっています。



外国人労働者が支える静岡の産業

静岡労働局の統計によれば、2025年10月末時点で県内の外国人労働者は約8万9千人。11年連続で過去最高を更新しています。製造業が最大の雇用先であることは想像に難くありませんが、近年特に伸びているのは医療・福祉分野。前年比29.4%増という数字は、少子高齢化が進む静岡県において、外国人材が介護現場を支える存在になりつつあることを示しています。

また、外国人を雇用する事業所の6割以上が従業員30人未満の中小企業であり、地域経済の基盤を外国人労働者が支えている実態が浮かび上がります。興味深いのは、静岡県では「永住者」「日本人の配偶者等」「定住者」といった“身分系”の在留資格を持つ人が44.2%と全国で最も高いことです。これは、静岡県が「働きに来る場所」ではなく、「暮らしを築く場所」として選ばれていることを意味します。

中国籍住民の姿 — 減少ではなく“安定”という特徴



中国籍住民は県内で約1万人。ブラジル、フィリピン、ベトナムに次ぐ4番目の規模です。特徴的なのは、製造業だけでなく、卸売・小売、宿泊・飲食など幅広い分野で働いていることです。そして、語学力を生かし、伊豆地域のホテルや都市部の小売店で多言語対応スタッフとして重要な役割を担っている点です。「中国人が減っている」という印象を持つ人もいますが、実際には急増でも急減でもなく、安定的に推移していると言えます。

一方で、東南アジアからの新規流入は明確に増えており、静岡県の外国人構成はゆっくりと変化しつつあります。

多文化共生へ — 静岡県が目指すべき方向

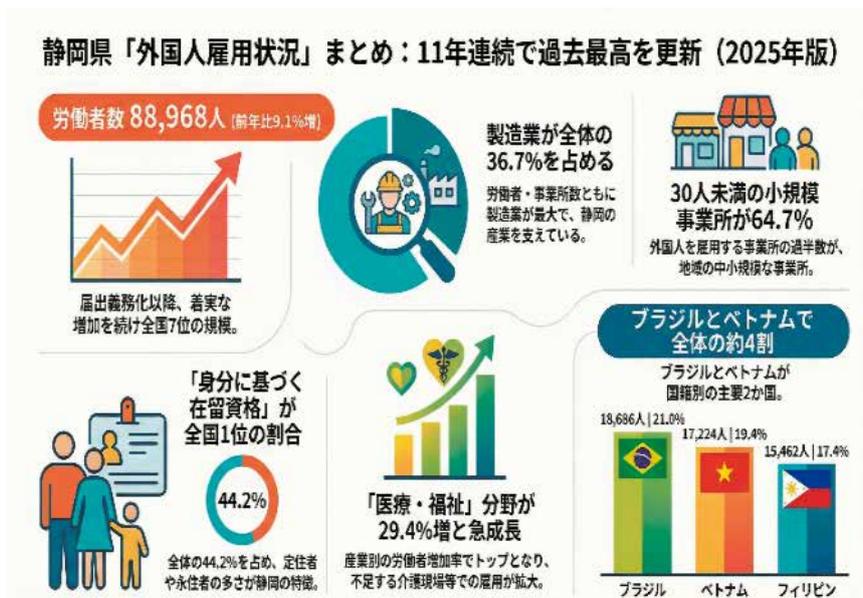
静岡県の外国人住民の動きを見ていると、単なる

労働力の話ではなく、地域社会の未来そのものが見えてきます。

- ・外国人住民を地域のパートナーとして迎えること
- ・産業構造に合わせた地域別・分野別の支援を行うこと
- ・中小企業の雇用管理を支え、働きやすい環境を整えること
- ・医療・福祉など需要が高まる分野での受け入れ体制を整えること

静岡県は、外国人住民の定着度の高さと産業との結びつきの強さを背景に、全国でも先進的な多文化共生モデルをつくる可能性を秘めています。

データを丁寧に読み解き、地域の実情に寄り添った施策を積み重ねていくことで、誰もが安心して暮らせる共生社会が形づくられていくはずです。



出所：厚生労働省静岡労働局・静岡県「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和8年1月30日発表）等を参照

『静岡県海外技術研修員』 行政交流・医療・経済で研修

県が1981年から続けている海外技術研修員受入事業、今年度は3名の研修員が来日し、4か月間にわたり本県で医療・行政交流・経済の分野で研修を行いました。行政・交流分野：王壮飛さん（写真右）は、県庁で健康福祉政策の研修を受けたほか、当協議会で日中交流に関する実務を学びました。医療分野：雷小菊さん（写真左）看護師の雷小菊さんは、県庁で健康福祉政策を学んだほか、県立総合病院、県立こども病院、浜松市リハビリテーション病院で看護理念や実践方法について研修し、現場での学びを通じて日本の医療体制への理解を深めました。経済分野：唐潔さん（写真中央）国際貿易や関税を専門とする唐潔さんは、（一財）静岡経済研究所で県内経済の動向を学び、県立大学グローバル地域センターでは静岡の産業構造について知識を広げ、地域経済の実情に触れる貴重な機会となりました。



研修手記 静岡で過ごした四か月—学びと出会い— 王 壮飛 浙江省衛生健康委員会

昨年10月末から、私は静岡での4か月間の研修生活をスタートさせました。最初の1か月は静岡県健康福祉部で、残りの3か月は静岡県日中友好協議会で研修を受け、行政から民間交流まで幅広い経験を積むことができました。

福祉の現場で感じた「尊重」の重み 健康福祉部での研修の中で、最も心に残っているのは浜松市の天竜厚生会を訪れた時のことです。障害者福祉、高齢者福祉、児童保育、家庭支援——その業務範囲の広さにまず驚かされました。しかし、何より印象的だったのは、障害者が同会の職場で健常者と一緒に働き、それぞれの持ち場で真剣に仕事に向き合っていた姿です。皆さんの表情は生き生きとしていて、仕事への誇りが伝わってきました。障害者が自分の力で働き、社会の一員として自然に溶け込むことであり、とは特別扱いをしない、「尊重」することを強く実感し、これこそが福祉の本質だと感じました。

スポーツがつないだ国境を越える友情 日中友好協議会での研修では、様々なイベントに参加させてもらいました。中でも、焼津市で行われたカローリング大会に参加したことは忘れられない思い出です。私のチームには、穏やかで親切な年配女性、柔和な印象の若い女性、フレンドリーで情熱的なヨーロッパ系の年配男性がいました。国籍も年齢も違う人たちが同じチームとして笑い合い、励まし合う——そんな温かいひと時でした。丁寧な説明のおかげで、少しずつコツをつかみ、ストーンがコートを中心に止まった瞬間、思わず声が出るほど嬉しかったです。スポーツを通じて文化が溶け合い、「友好」という言葉の意味を心から理解できた気がしました。

週末の静岡を走る——海と風と人の声 週末には、自転車に乗り、静岡の自然や街の空気を感じる時間を大切にしました。三保の松原や焼津港まで足を伸ばしたり、安倍川沿いを南へ走って海へ向かったり——海岸で陽光を浴び、潮風に吹かれると、心がずっと軽やかになりました。安倍川東側の公園では、週末になると、野球やサッカーの試合が行われ、子どもたちの声が響きます。その明るい声を聞くたびに、静岡の人々の前向きな暮らしぶりを感じ、私自身も元気をもらいました。

あっという間の4か月、心に残った静岡 光陰矢の如し——4か月の研修は本当にあっという間でした。その一日一日が濃く、温かく、私にとってかけがえのない経験となりました。静岡で出会った人々、学んだこと、見た景色、その全てがこれからの私の仕事や人生を支えてくれる大切な財産になると感じています。

駐在員レポート

上海今昔物語

国際都市・上海には歴史ある地域・建造物が数多くあります。それらの建造物が、今に残り、現代の人々の暮らしに利用されている様子を駐在レポートします。

20世紀初頭、「東洋のパリ」と呼ばれ目覚ましい発展を遂げた上海。現在も、街の至る所に重厚感ある建物が溶け込み、当時の面影を残しています。今日は地下鉄14号線に乗って、上海で最も近代的なエリア「陸家嘴(ルージャーズイ)」を歩きます。



静岡県上海事務所
石川祐介所長

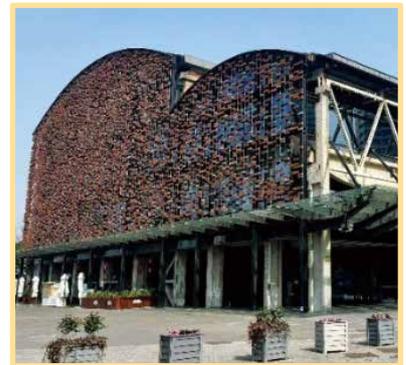
東洋のパリの面影を歩く



ガラス張りの高層ビルが林立し、世界の金融センターとして知られるこの街区「陸家嘴」。その喧騒から少し離れ、黄浦江沿いを20分ほど歩くと、突然、時代の流れから切り離されたような巨大建造物が姿を現します。それが「1862 時尚芸術中心」です。その名のとおり1862年から当地で造船所として歴史を刻んできた工場は、中国近代化の記憶を残しつつ2018年に商業施設・文化発信拠点へと生まれ変わりました。

造船所から文化拠点へ——150年の記憶を宿す建物

この工場は旧租界時代にはイギリス企業が操業し、後に中国資本となってからは、1978年に中国初の1万トン級貨物船「紹興号」を建造するなど、中国の造船業を牽引してきました。しかし、経済発展に伴う産業転換で造船機能は2005年に郊外へ移転。周囲の工場が次々と取り壊される中、この建物だけが奇跡的に残され、再生プロジェクトが動き出します。



建築家隈研吾が吹き込んだ新しい息吹

再生を手がけたのは、日本人建築家・隈研吾でした。彼は巨大な空間を持つ“尺感”（視覚的なバランス）を守るため、朽ちかけたコンクリートや赤錆びた鉄骨、600枚の天窗をあえて残し、建物の記憶を丁寧に継承しました。外壁には数千枚のレンガをカーテンのように吊り下げ、風に揺れるたびに光と影が揺らめきます。歴史の重みと未来的な美しさが同居する、不思議な魅力を放つ空間です。内部に足を踏み入ると、重厚な鉄骨の間にアパレルや飲食店が並び、800席の劇場にはアート集団「1B62 星球」が入居。文化発信拠点としての新しい顔が息づいています。



陸家嘴のすぐそばにある、上海ローカルの隠れ家

経済発展の象徴である陸家嘴から徒歩圏内にありながら、「1862 時尚芸術中心」は、感度の高い上海ローカルが足を運ぶ静かな隠れ家のような存在です。旧租界時代から工業化までの中国近代史を見つめてきた建物が、日本人建築家の手で再び息を吹き返し、いま、この地で新たな上海の文化を生み出そうとしています。

中国豆情報

トレンド：Game Science—新世代ゲームスタジオ

杭州には、DeepSeek や Unitree のように世界最先端の技術企業が集まっています。その中でゲーム分野から存在感を示しているのが **Game Science(遊戯科学)** です。

同社の前身は、2014年に馮驩が設立した深圳市遊科互動科技有限公司で、『百将行』『赤潮』などのモバイルゲームを制作してきました。2018年、社内チームが新作『黒神話：悟空』の開発を開始し、同年に杭州遊科を設立。2019年にはプロジェクトチームごと杭州へ移転しました。開発は杭州市の支援も受けて加速し、2024年に『黒神話：悟空』が全世界でリリース。中国初の本格 3A 級ゲームとして注目され、Steam では同時



游戏科学
GAME SCIENCE

接続者数 220 万人を突破し歴代 2 位の記録を達成しました。2025年には公式ブランド「黒神話 BLACKMYTH」を立ち上げ、衣類・アクセサリ・玩具などの派生商品をすべて自社で企画・生産。同年9月には杭州・西湖に初の実店舗をオープンし、約 1000 m²の空間にダークな中国風美学を取り入れたデザインでファンを魅了しています。

消費者物価指数：カップラーメン



私たちの暮らしの中で、物価の変化をもっとも実感しやすい食品のひとつがカップラーメンです。日本では消費者物価指数（CPI）の品目として、同じ商品を継続して調査する仕組みになっています。その中でカップラーメンの代表として選ばれているのが、日清食品の「カップヌードル」です。この“カップラーメン指数”を眺めると、日本では価格が上昇すると、生活の中での「物価の重み」を伝えてくれます。

《日清食品の「カップヌードル」⇒⇒⇒

1971年発売時 100円⇒2000年代約 120～150円⇒2020年代約 200円》

一方、中国ではカップラーメンは物価指標というより、巨大な市場を象徴する存在になっています。2024年、世界で食べられたインスタントラーメンは 1230 億食。そのうち中国・香港だけで 438 億食を占め、日本の 59 億食とは桁違いの規模です。中国では“国民食”としての圧倒的な消費量が際立っています。

《康師傅の「カップヌードル」⇒⇒⇒

1990年代 2～3元(約 40～60円)2000年代⇒ 3～4元(約 60～80円)2020年代: 6～10元(約 120～200円)》



中国はお茶の発祥地であり、飲茶の歴史は非常に長く、種類も豊富です。飲み物として楽しむだけでなく、薬のように健康のために飲まれることもあり、年齢・性別・地域を問わず、古くから中国人の生活に欠かせない存在として親しまれてきました。

健康のために・養生茶という文化

養生茶は、茶葉に漢方薬や天然の食材を組み合わせた、いわば「飲む養生」の文化です。薬食同源の考え方にに基づき、体質や季節に合わせて調合されるため、味わいよりも心身の調整を大切にします。

春は花茶で気の巡りを整え、夏はハーブで熱を払い、秋は果実の甘みで乾きを癒し、冬は根茎の力で身体を温める——そんな四季のリズムに寄り添う飲み物です。枸杞菊花茶で目の疲れを癒し、ケツメイシ茶で脂質を整え、杜仲茶で筋骨を養うなど、日々の小さな積み重ねが未病の段階で体を整える知恵となってきました。中国の健康茶市場は 2025 年に 642.7 億元へと成長し、2028 年には 1000 億元を超えると予測されています。健康を「日常の一部」として取り入れる人が増えている証です。



消費社会で日常化する養生茶

養生茶を手にするのは、25～45 歳の働き盛りの世代が中心です。南西部や東部、南部の都市では、忙しい生活の中で「飲むだけで整う」手軽さが受け入れられています。消費には三つの特徴があります。

まずは日常化で、月に 50 元以上を健康茶に費やす人が 9 割を超えています。次に機能志向で、安眠や体調維持といった効能を求め、薬材を使ったお茶を選ぶ人が多いこと。そして味覚と評価の重視で、味わいを大切にし、購入者の声を参考に選ぶ傾向が強まっています。健康への投資は、生活の質を高めたいという人々の願いの表れです。養生茶は「健康」と「飲料」という二つの世界をつなぎ、機能性と利便性を兼ね備えた新しい日常の飲み物になりつつあります。

養生茶——文化としての成熟へ

今、養生茶の世界は「精緻化」「日常化」「文化価値の付加」という方向へ進んでいます。企業には、安定した品質を支える技術、原料から販売までのサプライチェーン、そして文化的価値を伝えるブランド力が求められています。

健康を求める流れはこれからも続きます。その中で養生茶は、単なる飲み物ではなく、暮らしのリズムを整える小さな儀式として、ますます存在感を増していくと見られます。

人は人とつながる

中国の数学王 蘇歩青の足跡



浙江省温州市に生まれた蘇歩青(1902年～2003年)は、中国を代表する数学者として「数学王」と称される人物です。浙江大学から復旦大学に異動、文化大革命時に上海の造船所に下放となりながら、持ち前の数学意欲は衰えず、船体数学に関わります。1978年に復旦大学の学長にまでなり、数々の栄誉を得て、2003年、101歳で亡くなりました。

戦後の帰還と、学問への静かな復帰

戦争が終わり、疎開先の貴州から浙江大学が杭州へ戻った1946年の秋、蘇歩青も家族とともに帰還しました。荒れた校舎に再び灯がともり、黒板に数式が戻ると、彼は失われた時間を埋めるように研究室へ腰を落ち着けました。1948年、国民党中央研究院の院士に選ばれながらも台湾へ渡らず、中国に留まったのは、学問の根をこの地に

張り続けるという静かな決意からだったとされています。

1952年、大学再編により浙江大学の数学科が復旦大学へ統合されると、彼も大学所在地の上海へ移り、教務長、研究所所長、学長へと昇格し、数々の功績を残しました。激動の時代の中にあっても学問の灯をずっと守り続けました。



造船所で見たもの——数学が産業を変える瞬間

文化大革命のさなか、蘇歩青は江南造船所へ「下放」されました。そこで目にしたのは、数か月をかけて船体線図を描く技術者の姿でした。世界がコンピューター化へ向かう中、中国の造船はいまだ手作業に頼っていました。「数学で彼らの重荷を軽くできるはずだ」その思いから、彼はパラメトリック曲線を応用し、船体形状を数学で描く新しい方法を築き上げ、1978年、この研究成果は全国科学大会賞を受賞し、数学が産業を支える力を証明しました。

米子——中国に生き、中国に眠る

1953年、妻の米子は中国国籍を取得し「蘇松本」と名を改めました。中国で最初に帰化した外国人となりましたが、その人生は決して華やかに過ごすことはありませんでした。「結婚式では美しい衣装を着ていたが、戦争が始まってからは二度と良い服を着ることはなかった。米子は箏を携えて中国に来たが、琴には幾重にも埃が積もり、再び弾くことはなかった。」蘇歩青は後に、そう語っています。1986年、米子は81歳で亡くなりました。蘇歩青は遺灰の半分を中国に、半分を故郷へ——その願いを叶えるため、自ら仙台へ赴き、妻を故郷へ帰しました。数学とともに歩んだ彼の人生の傍らには、いつも彼女の静かな献身がありました。その蘇歩青も2003年、101歳で生涯をとじました。

発行所：静岡県日中友好協議会 発行人：増井浩二

静岡市葵区追手町44-1(静岡県産経会館1階) TEL:054-255-8111

※「NEWS LETTER」は、当協議会HP (<http://www.japanchina-shizuoka.jp/>)でも閲覧できます。